

委任統治期南洋群島における内地観光団（1928－1930年）

Tourist Parties in Micronesia under Japanese Mandate:1928-1930

千住 一

はじめに

本稿の目的は、1922年4月から日本の委任統治下にあった南洋群島において実施された「内地観光団」（以下、観光団）のなかでも、1928年から1930年にかけて組織された3回の観光団に着目し、関連史料に依拠しながら各観光団の行程および参加者について整理することにある⁽¹⁾。観光団とは、南洋群島の旧来からの住民（以下、住民）を参加者として、数週間にわたって日本内地に滞在し、各地を経巡ってから南洋群島へ帰還するというものであり、現時点で、1920年を除く1915年から1939年までのあいだ、年1回実施され続けたことが確認されている⁽²⁾。

すでに筆者は別稿で、軍政期に実施された計6回の観光団に関する詳細のほか⁽³⁾、委任統治期に組織された観光団のなかでも、1922年から1927年にかけて実施された6回の観光団の行程および参加者の詳細を明らかにしてきた⁽⁴⁾。以下、1928年に実施された委任統治期における7回目の観光団、1929年に実施された第8回観光団、1930年に実施された第9回観光団の行程および参加者について整理する。

I 第7回内地観光団（1928年）

1. 行程

(1) 内地での行程

1928年に実施された第7回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、『日の光』に掲載された観光団参加者による手記「第七回観光団日誌」（以下、第7回日誌）が挙げられる⁽⁵⁾。【表1】は、第7回日誌の内容を主とし、新聞報道を補足的に用いて再構成した、第7回観光団の内地における行動内容や訪問先である。それによると一行は、8月4日に横浜へ到着してから、東京、名古屋、京都、大阪、門司での滞在を経て、27日に再び横浜に上陸した後、28日に南洋群島へ向けて出発するという行程を辿っており、門司から横浜までの移動を含めて内地には25日間滞在している。

以下、第7回日誌の記述にもとづき、新聞報道による補足を加えながら、【表1】だけでは見えてこない一行の内地におけるより詳しい様子を確認したい。8月4日、日本郵船の近江丸で横浜に入港した一行は⁽⁶⁾、そのまま東京へ移動して平河町の繁星館に投宿するが、横浜に上陸した時の様子は次のように記されている。「オホキナフネヤ、チイサナフネヤ、リツパナイエヤ、ミタコトノナイオホキナキカイヤ、オゼイノ人タチガドンドンハタライテイルヨウスガ、一ベンニメニハイツテキタトキ、ナントモイワレナイホド、ホントニブンメイノクニニオドロキマシタ」⁽⁷⁾。

5日は日曜日だったこともあってか、教会を訪れたとあるものの、訪問した教会の詳細は不明である。6日は自動車でまず「シユツチヨウジヨ」に行ったとあるが、これは過去の観光団のありようを踏まえると、南洋庁出張事務所のことであろう。続いて一行は二重橋に向かっているが、そこでは、「ミンナソロツテ、ハルカニテンノウヘイカニ、ケイレイヲモウシ上ゲマシタ」とあり、第7回日誌の記述は、「ソウシテ私ドモハ、心カラ、ナントモイエナイアリガタイキガシマシタ」と続く⁽⁸⁾。

8日は「ダイニレンタイ」を訪れて演習を見学したとあるが、どの連隊であったかは不明である。第二連隊の見学を終えた第7回日誌の著書は、次のように書いている。「私タチモ、モシデキルナラ日本ノヘイタイニナリタイトサエ、オモイマシタ」⁽⁹⁾。また、靖国神社参拝の後に訪れた「ジングウグラウンド」では、野球を観戦したとある。神宮球場ではこの日、都市対抗野

球の準決勝戦として、東京対京城と大連対大阪の2試合が行われていたが⁽¹⁰⁾、観光団がどちらの試合を観戦したかは不明である。

9日に一行が訪れた石鹼工場の詳細は不明であるが、石鹼工場では、「イロイロココデ、オセワニナリマシタノデ、「パラオ」ノオドリヲスコシ、オレイノシルシニヤリマシタ」⁽¹¹⁾。その後を訪れた浅草では、活動写真を観覧してから、「カフェオリエンタル」で食事をとったという。10日は電車で動物園へ行った後、有楽町を訪れているが、そこでは、「ナンボウ」関係者による招待で会食が行われた。「ナンボウ」とは、当時の南洋群島各地において様々な事業活動を行っていた南洋貿易株式会社の略称である。ところで、会食の後に数名の参加者が「ビヨウインヘオミマイニユキマシタ」とあることから⁽¹²⁾、参加者のなかから何らかの原因で入院患者が発生した可能性が高いものの、第7回日誌には関連する記述が見当たらない。

11日については、「コノ日ハ、ニツキヲツケルノヲワスレテシマイマシタ」とだけ書かれているため⁽¹³⁾、第7回日誌から当日の行動内容をうかがい知ることはできないが、後日発行された『大阪毎日新聞』の報道から、一行は専売局を訪れたと考えられる⁽¹⁴⁾。12日は貯金局と、詳細は不明であるが肥料工場を自動車を訪れた後、一旦繁星館へ帰ってきているが、夕食後に「二人デアソビニデカケ」、「アカルイ日本ノ町ヲケンブツシテ、カエリマシタ」とあることから⁽¹⁵⁾、観光団参加者には一定の自由行動が認められていたようである。

内地滞在10日目の13日、一行は自動車で東京駅へ行き、そこから「トクベツキユウコウ」に乗って名古屋へ移動する。14日は名古屋市役所のほかに「セトモノコウバ」と「トケイコウバ」を見物したとあるが、当日の様子を伝える新聞記事によると、一行が訪れたのは「日本陶器、尾張時計、名古屋城」であった⁽¹⁶⁾。15日は、「ミツビシコウジヨー」と「ハウソウキヨク」を訪れているが、それらの詳細は不明である。また、放送局では、「パラオノウタヲウタツテ、ニホンノカタガタニキカセマシタ。[中略：引用者注]ニホンノカタニハ、ナンヨウノウタトシテ、ドンナニキコエタデシヨウカ」とあることから⁽¹⁷⁾、参加者が放送局でパラオの歌を披露し、それが何らかのかた

研究ノート

ちでラジオ受信者のもとに届けられたと考えられる。

名古屋から京都まで汽車で移動した一行が16日に訪れた「ヤオマサ」とは飲食施設のようで、そこで昼食をとったとある。その後一行は、ケーブルカーを利用して比叡山を訪れている。17日は京都駅まで行ったものの、「デンシヤゴコナイノデ、ヤドヤヘカエツテ、ヤスミマシタ」とあることから⁽¹⁸⁾、この日に予定されていた大阪への移動が、交通機関のトラブルによって取り止めになったことが分かる。

大阪への移動は翌18日に行われ、大阪に到着した一行は大阪駅前の金龍館に投宿する⁽¹⁹⁾。一行はその後各所を見て回っているが、19日付け『大阪毎日新聞』には、「本社楼上の南洋人観光団」というキャプションを付した参加者の写真が掲載されているため【図1】⁽²⁰⁾、18日は朝日新聞社だけでなく毎日新聞社も訪れたようである⁽²¹⁾。

図1 大阪毎日新聞社屋上での第7回観光団（1928年）



出典)『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け9面。

19日は電車で宝塚へ行き、「ワカイニホンノ、キレイナムスメタチガ、キレイモノヲキテ、ウツクシイコエデウタツタリ、オドツタリ」する芝居⁽²²⁾、すなわち宝塚歌劇団のレビューを鑑賞し、動物園を訪れた後、大阪へ戻っている。20日は⁽²³⁾、買い物に行った高島屋で屋上にのぼったあるが、そこから見た大阪の街について以下のような記述を残している。「オホサカノマチハ、ナントナクイソガシイヨウナマチデシタ。タクサンノイエガ、イツパイミエマシタ。ソシテホウボウカラ、ケムリガアガツテ、ソラハケムリダラケデシタ」⁽²⁴⁾。

21日、一行は汽車で下関に到着し、そこから連絡船に乗って門司へ至り、石田旅館に投宿しているが、いつ大阪を出発したのかは不明である。なお、21日は石田旅館での休憩後、活動写真を観覧しに出掛けたとある。23日は「アサヒノセメントエ、ケンブツニユキマシタ」とあるが⁽²⁵⁾、過去の観光団のありようから、セメント工場を訪れたと考えられる。「アサヒノセメント」を後にした一行は、市中で買い物をしている。

その後、一行は24日に門司を出港、26日に横浜沖へ至るものの上陸せず沖に停泊、27日に横浜上陸という過程をたどるが、24日の日誌には以下のような記述が見られる。「フネニノツテ、イヨイヨニホンノクニニワカレルトキ、ホントニカナシイココロガオキテ、ナミダガーパイデテキマシタ。モウナンダカ、バラオエカエルノガ、イヤニナリマシタ」⁽²⁶⁾。あるいは、26日に横浜沖で停泊する船内の様子は次のように描かれている。「ヨルノヨコハマノマチヲナガメテ、スギタ日ノニホンノマチヲオモイダシテ、ミンナデオソクマデハナシアイマシタ。ミンナジヨリクシタクシテ、ドウシテモネムリマセンデシタ」⁽²⁷⁾。これらを踏まえると、当初の予定では、一行は横浜に上陸することなく門司から直接南洋群島へ帰還する予定であったものの、何らかの理由で横浜上陸を果たすことになったと考えられる。

27日、横浜に上陸した一行は、汽車で横須賀へ移動し、横須賀駅まで迎えに来た海軍関係者とともに軍艦や飛行機を見物したとある。すなわち、一行は横須賀鎮守府を訪れたわけであるが、そこでの様子を伝える新聞報道によると、軍艦や飛行機のほかにも、一行は工場を訪れたり、鎮守府司令長官と

研究ノート

面会したりしている⁽²⁸⁾。なお日誌には、横須賀鎮守府に関して、「キレイニソウジノユキトドイタ、ニホンノグンカン、ゲンキナニホンノヘイタイヲミタトキニ、ニホンノクニノツヨイノガ、イマサラワカリマシタ」と記されている⁽²⁹⁾。

28日、一行は横浜出港前に買い物へ出かけているが、「アマリミンナガイロイロナモノヲカツテ、ホウボウアルイタノデ、タイヘンジカンガカカリマシタ」⁽³⁰⁾。その後、一行が乗った船は南洋群島へ向けて出発する。そこには内地で「オセワニナツタ人タチ」や「マエノシテウチヨウ」が見送りに来ていたとあるが⁽³¹⁾、彼らの詳細については不明である。

以上が25日間にわたる第7回観光団の内地における詳しい様子であるが、第7回日誌の記述により着目すると、日誌の著者が「日本人の働き振り」に大きな関心を払っていることに気が付く。つまり、上述のように、一行は内地各地で工場や労働の現場を多数訪れているが、そこで稼働する機械の様子や機械そのものの大きさに加え、現場で働く人々に対しても視線が向けられているのである。

例えば、8月7日に訪れた電話局については、「中へハイツテ、オドロイタコトハ、タクサンノキカイガ、ミワタスカギリナランデイルコトト、大ゼイノ人ガ、ヒマナシニハタライテイルコトデシタ」と記されているし⁽³²⁾、18日の造幣局訪問の際には、「私ドモガドコヘイツテモ、キガツイタコトワ。日本ノ人タチハ、タイヘンニヨクハタラクコトデシタ。ツヨイリツパナクニノ日本ノ人タチハ、コンナニヨクハタラクカトオモイマシタ。私ドモモ、コノ人タチノヨウニハタラカナクツテハ、イケナイトオモイマシタ。ソウシテバラオエカエツタラ、日本ノ人タチハドンナニハタラクカ、ヨクハナシテキカセヨウトオモイマシタ」と⁽³³⁾、南洋群島帰還後における取り組みも含めたかたちで、日本人の労働に対する姿勢を書き留めている。

(2) 内地滞在前後の行程

第7回日誌には、8月4日に横浜へ到着するまでと28日に横浜を出発してからの記述も含まれている。これらについて確認すると、まず第7回日誌は、

7月22日のパラオから記述が始まる。第7回日誌の執筆者はパラオ在住であり、22日は、執筆者とともにパラオから観光団に参加する計17名が、パラオ支庁長および南洋庁長官と面会してそれぞれから訓示を受けたとある⁽³⁴⁾。その後一行は23日にパラオを出発し、24日にヤップへ到着する。ヤップでは、ヤップ支庁長と面会して絵葉書を授受された後⁽³⁵⁾、郵便局の海底電信、公学校、寄宿舎を見学している⁽³⁶⁾。

25日にヤップを出発した一行はサイパンへ向かうが、時化のため、サイパンに船を寄せることができない日が続く。30日、サイパンに寄港して新たな乗客を得た後、一行を乗せた船は内地へ向かったとあるが、サイパン寄港の際にサイパン支庁内からの観光団参加者が乗船し、パラオからの参加者に合流したと考えられる。途中、8月2日に小笠原へ立ち寄り、小笠原支庁、博物館、郵便局、高等小学校を見学し、その日のうちに小笠原を出発している。その後、一行は4日に横浜に到着する。

続いて、8月28日の横浜出港後の足跡を確認すると、まず、31日に小笠原へ到着し、2時間ほど上陸した後に出港している。その後、9月3日にサイパン沖へ到着、4日にサイパンへ上陸し、サイパン支庁、小学校、公学校を訪れた後⁽³⁷⁾、小林旅館で昼食をとり、この日の夜は「私ドモノシツテイル人ノウチエトマリマシタ」とある⁽³⁸⁾。5日にはサイパンを出発する予定であったものの、天候不順が続いたため、サイパン沖で足止めされる。15日には天候が落ち着いたようで、数名の希望者がサイパンに一時的に上陸し、散髪などに赴いている。16日にサイパン沖を出発した後は、同日テニアン寄港、19日ヤップ寄港、20日パラオ到着となり、第7回日誌の記述は20日で終わっている。

2. 参加者

(1) 参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽³⁹⁾、南洋群島の委任統治機関たる南洋庁が発行した統計資料には、第7回観光団の参加人数が21名で、その内訳はパラオ支庁内の住民17名、サイパン支庁内の住民4名であることが記されて

研究ノート

いる⁽⁴⁰⁾。新聞報道の多くも同様のことを伝えていると同時に、上記のとおり、第7回日誌にはパラオからの参加者が17名であったという記述が見られる。

参加者の属性について確認すると、『都新聞』が、参加者には村長や南洋庁巡査が含まれており、南洋庁巡査が通訳を兼ねていると報じているほか⁽⁴¹⁾、『東京朝日新聞』は、具体的な氏名とともに、48歳の村長、39歳の助役、21歳の官庁給仕、21歳のサイパン巡警らが観光団に参加していると伝える⁽⁴²⁾。また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。

ところで、『大阪毎日新聞』には、参加者は旅費として南洋庁に135円を納入し、内地には100円を持参しているとするほか、参加者のなかには、三郎、一郎、周平といった日本的なあだ名を持つ者がいると記されている⁽⁴³⁾。なお、この三郎についてであるが、第7回日誌には、7月22日の南洋庁長官からの訓示に対し、「三郎ガミンナニカワツテ、オレイヲモウシアゲマシタ」とあるため⁽⁴⁴⁾、日本語話者であった可能性が高い。

その他、観光団は南洋庁の職員2名によって引率されており⁽⁴⁵⁾、第7回日誌および新聞各紙において、その存在は頻繁に言及されている。

(2) 参加者同士の交流

第7回日誌には、他の参加者の様子や参加者同士の交流についての記述が散見される。それらについて確認しておくとして、例えば、8月4日に横浜へ入港する直前の様子が次のように描かれている。「ミンナウレシソウナカオヲシテ、ナントナクオチツカナイヨウスデシタ。ソシテモウミンナ、オウサワギデシタ」⁽⁴⁶⁾。同様にその日の夜についても、「ユウゴハンヲタベテ、オフロヘハイツテカラ、私ドモハミンナイロイロナハナシデ、オホサワギデシタ。ネルノモワスレテ、オホキナコエデ、ハナシツツケマシタ。ヨシモト様〔観光団を引率した南洋庁職員のこと：引用者注〕ニ、ミンナオヤスミナサイトイワレテ、ヤツトネマシタ。ケレドミンナヒルマノカワツタヨウスヲオモイダシテ、ナカナカネムレマセンデシタ」とある⁽⁴⁷⁾。

また、18日は京都を出発する前に、参加者同士で「コノゴロ見タメヅラシ

イハナシヲシタリ、パラオノハナシヲシタリシマシタ」とあるし⁽⁴⁸⁾、25日に門司を出発した後の船内の様子は、以下のように描写されている。「ミナオキテ、モウニホンノハナシデオホサワギデス。スキナハナシヲ、ミンナコエヲダシテ、イツマデモイツマデモハナシアツテイマス。ソウシテ一日中ハナシアイマシタ。ヨルモオソクマデハナシツツケマシタ」⁽⁴⁹⁾。

Ⅱ 第8回内地観光団（1929年）

1. 行程

（1）内地での行程

1929年に実施された第8回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、『日の光』に掲載された観光団参加者による手記「第八回観光団日誌」（以下、第8回日誌）が挙げられる⁽⁵⁰⁾。【表2】は、第8回日誌の内容を主とし、新聞報道を補足的に用いて再構成した、第8回観光団の内地における行動内容や訪問先である。それによると一行は、7月3日に横浜へ到着し、東京、京都、大阪での滞在を経て、19日に横浜から南洋群島へ向け出発するという行程を辿っており、内地には17日間滞在している。

以下、第8回日誌の記述にもとづき、新聞報道による補足を加えながら、【表2】だけでは見えてこない一行の内地におけるより詳しい様子を確認したい。7月3日、日本郵船の春日丸で横浜に入港した一行は、自動車で桜木町まで行き、そこから電車で東京駅まで移動、東京駅からは自動車で繁星館へ向かっているが、横浜には「ナイチノナンヨウチヨウノカタガ、ムカイニキテクダサツタ」⁽⁵¹⁾。繁星館で休憩した後は、「五人ノヒトト、イツシヨニカイモノニイキマシタ」とあるが⁽⁵²⁾、その詳細については不明である。

4日は、自動車で二重橋前まで行き、「サイケイレイ」をしている。第8回日誌によると、その後訪れた丸ビルではお茶と菓子を食べたただけであるが、新聞報道によると、買い物をする機会もあったようである【図2】⁽⁵³⁾。

図2 丸ビルでの第8回観光団（1929年）



出典) 『やまと新聞』 1929年7月5日付け夕刊2面。

丸ビルを後にした一行は、自動車で東京市役所を訪れ、そこで「一バンエライオカタニ、アイサツヲシテ、ソウシテイロイロオシエテイタダキマシタ」とあることから⁽⁵⁴⁾、東京市長に面会したようである⁽⁵⁵⁾。なお、『東京朝日新聞』によると、東京市役所では「東京市内名所案内の写真帳」が一行に贈呈された⁽⁵⁶⁾。その後、自動車で訪れた「ナイカク」では、昼食に招待されたと記されているが、過去の観光団のありようや『中央新聞』の報道内容を踏まえると⁽⁵⁷⁾、「ナイカク」とは、当時内閣内に設置されていた南洋庁出張事務所のことであろう。また、夕方は、「大ヨウシヨウテン」の招待で丸ビルの精養軒にて会食を行ったとあるが、「大ヨウシヨウテン」の詳細については不明である。

5日に訪れた拓務省では、「エライオカタニアイサツ」をしたとある⁽⁵⁸⁾。各新聞報道によると、これは当時拓務省次官を務めていた小村欣一との面会のことであり、小村はそこで一行に対して次のように述べたという。

南洋群島の委任統治に就ては、我国は始めての経験で非常に責任を感じて居る。従来と雖も島民の幸福、文化の向上に努めて来たが、今回拓務省が出来たので益々諸君の幸福を図ると共に、一面日本が国際場裡に於て委任統治の模範を示す意気込で努力する方針である。諸君は日本に来

て色々感想があらうが、日本が如何に熱情を以つて諸君を歓迎しつゝ、あるかを諒解されたい⁽⁵⁹⁾

その後一行は、華族会館にて南洋庁の書記官や⁽⁶⁰⁾、拓務省の「エライオカタ」と会食を行っているが、各新聞報道によると、会食は小村が主催したものであった。その後に訪れた東京放送局では、「ラジオヲミマシタ」とあるため⁽⁶¹⁾、ラジオ放送と関係がある施設を見学したと考えられる。

6日は各学校を訪問しているが、東京市立第一中学校では体操と柔道が、東京府立第五高等女学校ではダンスと歌が、それぞれ在校生によって披露されている。女学校では昼食後にテニスをし、それから自動車で明治神宮参拝に訪れている。続く7日は日曜日であったため、「イワムラ」という宣教師の引率で霊南坂教会を訪問し⁽⁶²⁾、その後は自動車で各所を訪れた。8日に訪れた近衛第一連隊では、「ヘイタイサンガ、イクサノマネ」をしているところを見学したほか⁽⁶³⁾、活動写真を観覧している。その後、自動車で訪れた専売局では、「オンナノシゴトノハイイコト」に驚いたとある⁽⁶⁴⁾。なお、松屋からは電車で帰路についている。

9日は、柳島の花王石鹼工場を訪れた後に浅草へ赴き、「カフエーオリエント」で昼食をとってから、「ハナヤシキヤデンキカンヤ、トウケウカイカンエイツテ、カツドウヤダンスヲミマシタ」⁽⁶⁵⁾。その後、浅草から上野まで地下鉄で移動し、「ダルマ」で夕食をとった後、銀座を見物して宿舎に帰ったという。

10日、一行は再び銀座を訪れて買い物をしているが、一行が銀座に滞在しているあいだ、第8回日誌の著者のひとりであるフランクは、東京市役所、拓務省、南洋庁出張事務所へ挨拶へ行き⁽⁶⁶⁾、別の著者であるポーアスは、6日に訪れた第五高等女学校を再び訪問している。特に後者のポーアスは、観光団から女学校への土産として鼈甲と扇を持参したとある。その後、「ヒルワギンザノ、カフエータイガーデ、ナンボウノ、シヨウタイデゴチソウニナリマシタ」とあることから⁽⁶⁷⁾、昼食時にはフランクとポーアスも一行に合流して、「ナンボウ」すなわち南洋貿易主催の食事会に出席したと考えら

研究ノート

れる。

内地滞在9日目の11日、一行は自動車で東京駅まで行き、そこから汽車に乗って京都駅まで移動し、さらに自動車で宿舎たる日吉屋まで赴く。12日に訪れた「カフェーキクスイ」では、京都市の招待による昼食会が開催されている。13日は、ケーブルカーで比叡山にのぼって坂本まで出て、そこから電車で大津へ移動した後、「ソスイヲフネデキヨウトエカエリマシタ」とあることから⁽⁶⁸⁾、琵琶湖疎水やインクラインを利用して帰途についたことが分かる。

14日に大阪へ移動した一行は、16日に「オカネヲツクルトコロ」すなわち造幣局を訪れている。その後、高島屋を後にした一行は電車で阿倍野まで行き、そこから自動車で平野にある大日本紡績の工場を訪問する。また、17日に訪れた宝塚では、ダンスや活動写真をみたとあるので、宝塚歌劇団のレビューを観劇したようである。その晩、一行は横浜に向けて大阪を出発した。

横浜には翌18日に到着し、宿舎で休憩した後、買い物へ出かけている。19日、一行は横浜を出発しているが、そこには、「ナンヨウチヨウノ、シユツチヨウシヨノカタ」のほか、「ポナベカラトウケウエベンキヨウニキテオル、二人ノ女ノ子」が見送りに来ていた⁽⁶⁹⁾。

以上が17日間にわたる第8回観光団の内地における詳しい様子であるが、第8回日誌の記述により着目すると、日誌の著者が、比較的高層の建物からの眺望に関心を払っていることに気が付く。例えば、5日に訪れた愛宕小学校では「一バンタカイトコロエアガツテ、ホウボウヲミマシタ」とあるし⁽⁷⁰⁾、10日に訪れた三越では「一バンタカイトコロエ、アガツテ、トウケウ中ヲミマシタ」と記されている⁽⁷¹⁾。

(2) 内地滞在前後の行程

第8回日誌には、7月3日に横浜へ到着するまでと19日に横浜を出発してからの記述も含まれている。これらについて確認すると、まず第8回日誌は、6月27日のパラオから記述が始まる。27日は南洋庁、郵便局、「ナンボウ」を訪れ、南洋庁では、南洋庁長官から次のような訓示を受けたとある⁽⁷²⁾。

「ダイー、カラダヲタイセツニスルコト、ダイニワ日本ノ人ガゲンキヨクハ
タライテオルノヲ見テクルコト、ダイ三バンメンワ、オヤクシヨノカタノユ
ウコトヲヨクキクコト」⁽⁷³⁾。同日、一行を乗せた船はパラオを出港し、途
中で寄港することなく7月3日に横浜へ到着しているため、後に見るように
ポナペ支庁およびヤルート支庁からの参加者によって構成されていた第8回
観光団は、パラオで、もしくはパラオに到着するまでに全参加者が参集した
と考えられる。

次に7月19日に横浜を出港してからの記述を確認すると、21日に船中で「ニ
ホンカラカツテキタ、チクオンキヲナラシテキイタ」とあるほかは⁽⁷⁴⁾、特
筆する事柄が見られない⁽⁷⁵⁾。第8回日誌は、翌26日にパラオ到着予定であ
ると記された25日の記述をもって終わるが、日誌は以下のような文章で締め
くくられている。

ナイチノヨウナ、リツパナトコロエ、ミニイキマシタノワ、ナンヨウチ
ヨウヤ、シチヨウソノホカ、ヤクシヨノエライオカタノオカゲデスカラ、
ソノゴオンライツシヨウ、ワスレナイヨウニシマシヨウト、ミンナデハ
ナシアイマシタ⁽⁷⁶⁾

2. 参加者

筆者がすでに明らかにしたように⁽⁷⁷⁾、南洋庁が発行した統計資料には、
第8回観光団の参加人数が15名で、その内訳はポナペ支庁内の住民10名、ヤ
ルート支庁内の住民5名であることが記されており⁽⁷⁸⁾、新聞報道の多くも
同様のことを伝えている。また、参加者の属性を確認すると、複数の新聞報
道に「村長」や「巡警」、「豪農」といった肩書きが見られるほか、各新聞報
道の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。

その他、観光団は南洋庁の職員3名によって引率されており⁽⁷⁹⁾、第8回
日誌および新聞各紙において、その存在は頻繁に言及されている。

Ⅲ 第9回内地観光団（1930年）

1. 行程

（1）内地での行程

1930年に実施された第9回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、『日の光』に掲載された観光団参加者による手記「第九回観光団日誌」（以下、第9回日誌）が挙げられる⁽⁸⁰⁾。【表3】は、第9回日誌の内容を主とし、新聞報道を補足的に用いて再構成した、第9回観光団の内地における行動内容や訪問先である。それによると一行は、6月30日に横浜へ到着し、東京、京都、大阪、東京での滞在を経て、7月26日に横浜から南洋群島へ向けて出発するという行程を辿っており、内地には27日間滞在している。

以下、第9回日誌の記述にもとづき、新聞報道による補足を加えながら、【表3】だけでは見えてこない一行の内地におけるより詳しい様子を確認したい。6月30日、一行を乗せた日本郵船の山城丸が横浜に入港するが、そこには、「南洋庁カラ野田サンヲハジメホカノ人タチガ、ハタヲモツテムカイニキテクレマシタ」⁽⁸¹⁾。横浜に上陸した一行は、桜木町駅まで歩いてそこから電車に乗り、「電気ノタクサンツイタ、キレイナニギヤカナ町」を車中から眺めながら⁽⁸²⁾、東京駅を目指す。東京駅からは東京滞在中の宿舎である繁星館まで自動車で向かい、繁星館では朝日新聞社による取材を受け、写真撮影も行われた。

7月1日は、朝、自分たちの写真が掲載された新聞を笑いながら閲覧したという。【図3】は、前日に一行を取材した『東京朝日新聞』に掲載された写真であり、第9回日誌の記述はこの記事のことを指していると考えられる⁽⁸³⁾。その後実施された健康診断は、医者が繁星館を訪れて行われたものであり、特に健康上の問題を抱えている参加者はいなかった。日比谷公園の後は「南洋庁」を訪れたとあるが、従来の観光団のありようを踏まえると、南洋庁東京出張事務所のことであろう⁽⁸⁴⁾。そこでサイダーを飲んだ後、一行は電車で繁星館まで戻り、夕食後は付近を散歩した。

図3 繁星館での第9回観光団（1930年）



出典)『東京朝日新聞』1930年7月1日付け7面。

2日、一行は電車で桜田門まで向かい、それから宮城遙拝を行い、楠正成の銅像を見た。拓務省では拓務大臣からの訓示があり⁽⁸⁵⁾、昼は拓務省の招待により松本楼で「洋食」を食べている。その後を訪れた東京市役所でも東京市長からの訓示があり⁽⁸⁶⁾、日本郵船では茶菓の饗応を受けた。夜は、「ミシマサンノオセワニナツテ居ルフランス」という人物が繁星館を訪れて一行と親睦を深めているが⁽⁸⁷⁾、「内地ニキテカラ、タイヘンギョウギモヨクナリ、大ククナツテ日本語モズイブン上手」になった「フランス」を見て、第9回日誌の著者は、「私モ弟ヲ内地ニヨコシテ、ベンキヨウサセタクナリマシタ」と書いている⁽⁸⁸⁾。このことから、「フランス」は日誌の著者の居住地であるアンガウルから内地に留学している人物であると考えられる⁽⁸⁹⁾。

3日は電車で銀座まで行き、ミキモト真珠店などを見たり、資生堂でアイスクリームを食べたりしながら、日比谷まで歩いたという。それから明治神宮を参拝し、神宮球場では早稲田中学と麻布中学の試合を途中まで観戦した後、自動車で繁星館まで戻っている。4日は電車で上野まで行き、西郷隆盛の銅像を見た後に動物園へ向かう。動物園の後に訪れた松坂屋から繁星館までも電車を利用しており、夜は繁星館の前の道路で行われていた縁日を見物

研究ノート

している。

5日に訪れた飯田町の大松閣では、「ナンボウ」すなわち南洋貿易主催の昼食会が開催されている。その後を訪れた近衛歩兵第一連隊では、銃器を使用した訓練を実見したほか、サイダーと菓子が饗された。靖国神社参拝の後に向かった明治座では、そこで上演されている芝居に出演していた女優の水谷八重子と面会し、一緒に写真を撮影している。この出来事には新聞各紙が目撃し、参加者の1人と水谷が握手をしている様子が『時事新報』、『中外商業新報』、『万朝報』の3紙に掲載された【図4】⁽⁹⁰⁾。

図4 明治座での第9回観光団（1930年）



出典)『万朝報』1930年7月6日付け3面。

なお、一行を引率していた南洋庁職員は、後日、この時の様子を以下のように回顧している。

案内されて楽屋を見学したところ、[中略：引用者]水谷八重子さん（当時二十歳前後）が、出演姿のままでいて非常に喜ばれ、サイン入りの写真とほかに何か記念品を[観光団の：引用者注]団員に渡され、また最年少十六歳のサイパン島酋長の息子と、通訳なしに話をしたり、握手など

されて、大いに愛嬌を振りまかれた⁽⁹¹⁾。

6日は日曜日ということもあり、小石川教会の関係者が一行を迎えに来て、教会へ向かっている。第9回日誌には、「センキヨウシワ私タチノキタコトヲタイヘンヨロコンデクレマシタ」とあり、教会では「センキヨウシトイロイロナオハナシ」をした⁽⁹²⁾。なお、各新聞報道によると、この日は放送局で参加者数名が南洋群島の民謡を披露する予定であったが⁽⁹³⁾、第9回日誌には該当する記述が見られない。

7日は、自動車で亀戸の石鹼工場まで赴き、その後に訪れた「カフェーオリエント」では、「南海商事会社」による昼食会が開催されているが、「南海商事会社」の詳細は不明である。花屋敷は浅草区役所関係者の案内によるものであり、「富士カン」では活動写真を観覧したほか、絵葉書が一行に贈呈されている。8日は貯金局を見学しているが、その際に、「私タチ島カラキテオル報告書ヲミセテモラ」ったとある⁽⁹⁴⁾。三越での買物の後、一行は一旦繁星館に戻り、それから東京劇場へ観劇に出かけた。

9日は各学校を訪れているが、御茶ノ水高等女学校では生徒が一行にダンスを披露した。その後、「内幸町ノ東洋ビル内」にある南洋興発株式会社を訪問して昼食をとっているが、南洋興発は、1923年からサイパンを中心に製糖業を営み、当時の南洋群島において多大な影響力を有していた企業である⁽⁹⁵⁾。10日は自動車で肥料工場と石鹼工場をまわり、レコード石鹼の工場では土産に石鹼を買った。

「カイモノノ日」であったという11日は、電車で銀座へ行き、銀座を散策しながら高島屋へ行き、そこでは、「ミンナ思イ思イニ買物ヲスマシテカラ、食堂ニ行き、オヒルヲタベマシタ」⁽⁹⁶⁾。なお、『東京毎日新聞』によると、11日は「サイパン支庁警務課巡警」の肩書きを有する参加者ほか5名が、昼の時間帯に警視庁を訪問して各部各課を見学したとあるが⁽⁹⁷⁾、第9回日誌には該当する記述が見られないため、第9回日誌の著者は警視庁を訪れていないと考えられる。

内地滞在13日目の12日、「出張所ノ方々ニ見送ラレ」ながら⁽⁹⁸⁾、一行は東

研究ノート

京駅から大阪行きの汽車に乗る。途中、食堂車で昼食をとりながら移動を続け、京都駅で下車し、そのまま宿舎に入った。13日は、宿舎から電車で出町柳を経由して八瀬に向かい、そこからケーブルカーで比叡山に赴いている。比叡山ではケーブルカーを乗り継いで坂本まで行き、そこから電車に乗って宿舎まで帰っているが、途中でインクラインを見たとある。夕食後は京極へ行き、松竹座で活動写真を観覧している。

14日の昼は、商品陳列所の後に市役所から「西洋リヨウリ」が提供されたとあるものの、場所についての記述はない。また、午後を訪れた京都大学病院では、元パラオ病院長の「タカサキサン」という人物に案内され⁽⁹⁹⁾、院内を見学しているが、東本願寺の後に訪れた「サイダーラツクル工場」についての詳細は不明である。また、宿舎での夕食後、京都日日新聞社から案内があったという博覧会を、第9回日誌の著者を含めた希望者9名が観光団の引率者に連れられて訪れたとあるが、日誌には「中ワタイヘンメヅラシイモノデ、ケンブツ人ガイツパイデシタ。ケンブツシテカラ、サークリングニノリマシタ。マルデ船ニノツタヨウナキモチデ、大ヘンウレシウゴザイマシタ」とあるのみで、博覧会の詳細は不明である⁽¹⁰⁰⁾。

15日、一行は京都から汽車に乗って大阪へ向かい、金龍館に投宿する。その後訪れた市役所では「西洋リヨウリ」を提供された上、「タクサンノミヤゲ」が贈呈された。それから一行は宿舎へ戻っているが、昼寝をしたり、荷物を片付けたり、宿舎の前の「玉屋」で遊んだりと、参加者は思い思いの行動をとっている。16日は、高島屋で買い物をした後に一旦宿舎へ戻っているが、「私タチハ毎日フロニハハイリマシガ、海ニハパラオヲ出テカラ一度モハイラナイノデ、タイヘン海ニハイリタクナリマシタカラ」⁽¹⁰¹⁾、観光団の引率者に海へ連れて行くよう依頼している。その結果、大阪と神戸のあいだにある「コウロエン」という海水浴場を訪れているが、「アマリ人ガオオクテハヅカシクナツテ、ハイラナイ人モアリマシタ」⁽¹⁰²⁾。

17日は午前中宿舎で休憩した後、自動車でガラス工場とボタン工場へ行き、ガラス工場では見学の後に「キネンニミナイロイロナモノヲ安ク買イ」⁽¹⁰³⁾、ボタン工場では貝からボタンができる様子を実見している。その後、電車で

向かった文楽座では人形芝居を観覧する。18日の午前中は自由行動だったようで、「ミンナ思イ思イノコトヲシテ休ミマシタ」とあるが⁽¹⁰⁴⁾、第9回日誌の著者を含めた9名は、観光団の引率者に連れられて高島屋の「大ウリダシ」に出かけている。造幣局以降の訪問先は昼食後に訪れており、造幣局では一銭銅貨が鑄造される様子を、大阪朝日新聞社では新聞が印刷される様子をそれぞれ実見した。

19日の神戸行きは日帰りで行われた。往復とも急行電車を利用したようで、造船所では軍艦や民間の汽船、機関車などの造成過程に触れている。20日の宝塚行きも日帰りで行われており、「電車ニ乗ツテ、タカラヅカゲキジヨウエ、少女カゲキヲ見ニ行キマシタ」とあることから⁽¹⁰⁵⁾、宝塚歌劇団のレビューを観覧したことが分かる。

21日、一行は大阪から汽車で東京へ向かっているが、東京駅には「南洋庁ノ東京ニイル人ガ、大ゼイムカイニキテイテクレマシタ」⁽¹⁰⁶⁾。22日は、電車と地下鉄を乗り継いで再び浅草を訪れており、「カジノフトリユー」では「イロイロナメヅラシイダンス」を、松竹座では「イロイロナメヅラシイガイコク人ノカツドウシヤシン」を観覧した。23日は国技館を訪れているが、「中ニハイルトフジサンガデキテイテ、ミツガナガレテイテ、大ヘンススシイキモチナリマシタ」とあることから⁽¹⁰⁷⁾、そこでは何らかのイベントが開催されていたようである。そこで当時の新聞記事を確認すると、国技館では「富士登山大納涼会」と銘打たれた催し物が8月末まで開催されている⁽¹⁰⁸⁾。

24日、一行は東京駅から電車で横須賀へ向かう。横須賀では、海軍関係者の案内で追浜飛行場の飛行機やドックに停泊中の軍艦を見たことあるため⁽¹⁰⁹⁾、横須賀鎮守府を訪れたことが分かる。一行は、鎮守府内で活動写真を観覧したりサイダーを飲んだりしたほか、新聞が伝えるところによると、下士官兵集会所でカレーライスを食べたという⁽¹¹⁰⁾。横浜の宿舎に宿泊した一行は、翌25日、伊勢崎町で買い物をし、出発の準備をする。そして26日、一行は山城丸に乗り込み、横浜から南洋群島に向けて出発した。

以上が27日間にわたる第9回観光団の内地における詳しい様子であるが、第9回日誌の記述により着目すると、いくつかの特徴的な点に気が付く。第

研究ノート

一が、高所からの眺望について書き留めている点である。例えば、7月2日に訪れた日本郵船の屋上からは、「東京市ヲ目ノ下ニ見、タイヘンユカイナキモチニナリマシタ」とあるし⁽¹¹¹⁾、13日は比叡山から京都や琵琶湖を一望したとあるほか、15日は大阪市役所の屋上から市中を見渡し、「ドコヲ見テモ、大キナエンツトガナランデオリ、ケムリガーパイデ、トオクマデ見渡スコトガデキマセンデシタ」と記している⁽¹¹²⁾。

第二が、労働への着目である。5日に訪れた専売局では、工場で多くの職工がタバコをつくる様子を見て、「日本ノ人ワミナヨクハタラク人バカリデ、私ガ^{ママ}カンシンシマシタ」とあるほか⁽¹¹³⁾、8日に訪れた貯金局では、「ホントニ日本ノ人ワワカイモノモ、トシヨリモヨクハタラクノニオドロキマシタ」⁽¹¹⁴⁾、12日に至っては、東京から京都へ向かう車窓から農作業をする人々を見て、「私タチモ島ニ帰りマシタラーシヨウケンメイニ、ハタラカナケレバナラナイト思イマシタ」と書いている⁽¹¹⁵⁾。

第三が、各都市の比較である。例えば、第9回日誌の著者は13日に、「京都ハ東京トクラベテ見マスト、町ハアマリリツパデワアリマセンガ、スグ近クニ山ガアリ、町ノ中ヲ川ガナガレテイテケシキガ、東京ヨリヨイト思イマシタ」と、京都の印象を東京との対比において記している⁽¹¹⁶⁾。同様に、15日には大阪の交通事情が東京や京都のそれと比較されながら書かれており、そこには、「今日一寸見タトコロデワ、電車ヤ自動車ガ東京ヨリオオイヨウナキガシマシタ。ソシテ自動車ワ東京ヤ京都ニクラベテ、早くハシツテ、ホントニアブナクオモイマシタ」とある⁽¹¹⁷⁾。

第四が、内地滞在中の自主的な行動についてである。一行が大阪に到着した15日の夜、観光団の引率者は一行に対して、大阪は東京よりも交通事故が多いため、宿舎付近を散歩する際には注意するよう言い渡しており⁽¹¹⁸⁾、16日も、宿舎付近の散歩についての注意が引率者から繰り返された。その結果、17日の「夜ワサンポニ出ヨウト思イマシタガ、大阪ワ自動車ガ多く、私タチダケデワアブナイ」と考え、散歩を中止したとある⁽¹¹⁹⁾。これらの記述より、一行は東京や京都では宿舎の周辺を比較的自由に歩き回っていたと推察される。

第五が、内地に関する情報についてである。端的な例が8日に訪れた三越に関する記述であり、そこでの様子は次のように書かれている。「三越ノハナシワ、マエカラキイテイマシタガ。中ニハイツテミテ、ソノ大キイノトキレナノト、ケンブツ人ガタクサンイルノニオドロキマシタ」⁽¹²⁰⁾。つまり、少なくとも第9回日誌の著者は、三越を訪れる前から、そこに関する情報に何らかのかたちで接していたのである。

（2）内地滞在前後の行程

ところで、第9回日誌には、6月30日に横浜へ到着するまでと7月26日に横浜を出発してからの記述も含まれている。これらについて確認すると、まず第9回日誌は、6月19日のパラオから記述が始まる。19日は、観光団参加者がパラオ支庁長および南洋庁長官と面会し、それぞれから訓示を受けている⁽¹²¹⁾。20日は、パラオ支庁で観光団の引率者と合流した後、山城丸に乗船してヤップに向かっているが、「ハトバニワミオクリノ人々ガ、タクサンイテ、タイヘンニギヤカデゴザイマシタ」⁽¹²²⁾。

21日、ヤップに到着した一行はヤップ支庁を訪問し、その後は支庁関係者の案内で郵便局、海底電信、公学校、農場、ウルル村を訪れ⁽¹²³⁾、ヤップを出発しているが、第9回日誌の著者は、ヤップの村落に関して、「パラオニクラベテ見ルト、マダヒラケテイナイヨウナ、キモチガシマシタ」と書き残している⁽¹²⁴⁾。24日、一行はテニアン沖に到着するものの、テニアンで伝染病が流行していたため上陸を見合わせ、そのままサイパンへ向かう。

25日、一行はサイパンに上陸するが、第9回日誌の著者は、上陸した時の様子を次のように記す。「私タチラムカイニキタ人ヤ、汽車ヤジドウシヤナドガ、タクサンアツテ、ナンダカ内地ニツイタヨウナ、キブンガシマシタ」⁽¹²⁵⁾。その後、郵便局で電報を頼んでからサイパン支庁へ向かい、サイパンから合流する観光団参加者と面会したという。続いて、サイパン支庁関係者の案内で病院、小学校、公学校、ガラパンの町を見物してからサイパンを出発するが⁽¹²⁶⁾、小学校については、「パラオニクラベテ、タイソウキレイデ、セイトモタイソウ多」いと書いている⁽¹²⁷⁾。26日、船中からウラカス火山が

研究ノート

噴火している様子を見た日誌の著者は、「村ニ帰りマシタラコノハナシヲシヨウトオモツテヨクヨク見マシタ」と記す⁽¹²⁸⁾。そして30日、一行は横浜に入港する。

次に、7月26日に横浜を出港してからの記述を確認すると、8月1日、一行は「カンコウダンラムカイニキテオル人デーパイ」のサイパンに上陸し、「スグサイパンノ観光団ノ人ノ家ニ行キ、サイパン島民料理デ朝メシヲタクサンゴチソウニナリマシタ」⁽¹²⁹⁾。その後、「役所」を訪れてサイパン在住の観光団参加者と別れたとあるが、これはサイパン支庁のことであろう。この日は船に戻らず「サイパンデヨクアソビ」、夜は「サイパンノ人ニゴヤツカイ」になった⁽¹³⁰⁾。

2日、残りの参加者はサイパンを出発する。3日、一行はテニアンに上陸し、南洋興発関係者の案内で、南洋興発の「第一第二第三農場」や製糖工場、テニアンの町を見て回っているが⁽¹³¹⁾、テニアンを開拓した日本人の話に関係者から聞いた第9回日誌の著者は、「ホントニ日本ノ人ワヨクハタラクト思イマシタ」と書き残している⁽¹³²⁾。4日、一行はヤップに向けてテニアンを出発、8日、ヤップに到着するも上陸せずにそのままパラオへ向かい、9日、パラオに到着する。港には、「役所ノ人ヤ村ノ人ワ、タクサムカイニキテクレマシタ」とあり⁽¹³³⁾、2日後に「役所」を訪問する予定であるという記述をもって、第9回日誌は終わる。

ところで、第9回日誌の著者は、内地観光を終えての心情をたびたび日誌に記している。例えば、パラオに到着する2日前の8月7日には、

今度村ニ帰りマシタラ、ドンナコトヲシタラヨイデシヨウカト、イロイロナカンガエヲシマシタ。内地デ見学シタトキニワ、オドロクモノバカリデ、イマワユメデモ見タヨウナモノデスカラ、オボエタコトダケ村ノ人ニヨクハナシテ、村ノ為ニツクシタイト思イマス。私ノカンガエワ、コレカラヨクオカネヲタメテ、コドモヲ内地ノ学校ニヤリ、ダイクサントカ、カヂヤサントカ、フクヤサントカ、ソウユウシゴトヲナラワセタイト思イマス。南洋群島ワ世カイノ中デーバンオクレテオリマスカラ。

日本ノ人デモ南洋ノコトヲシラナイ人多クゴザイマス。世カイノ人カラシラレルヨウニシナケレバナラナイト思イマス。ソレニワベンキョウト、ハタラクコトガダイダト思イマス⁽¹³⁴⁾。

と書いているし、翌8日には次のように書いている。「島民ガミンナノンキニナツテオリマスカラ、イクラ日本人ノハタラクコトヲイツテモ、ウソノヨウニオモイマス。デキルコトナラミンナ観光団ニヤツテ、日本人ノハタラクコトヲミセテヤリタイデス」⁽¹³⁵⁾。

2. 参加者

（1）参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽¹³⁶⁾、南洋庁が発行した統計資料には、第9回観光団の参加人数が19名で、その内訳はサイパン支庁内の住民5名、パラオ支庁内の住民14名であることが記されており⁽¹³⁷⁾、新聞報道の多くも同様のことを伝えている。

次に参加者の属性を確認すると、「大工、製材職工、巡査などである、いづれも南洋土人のよいものばかりをつれて来た」⁽¹³⁸⁾、「通訳の巡警の外、大工、製材職工宗教学校生徒など」⁽¹³⁹⁾、といった新聞報道が見られるほか、上述したように、7月5日に明治座にて水谷八重子と握手した参加者は日本語を話す「十六歳のサイパン島酋長の息子」であり、11日に警視庁を訪問した参加者のなかには「サイパン支庁警務課巡警」という肩書きが見られる。なお、既述のとおり第9回日誌の著者は「アンガウル巡警」という肩書きを有しているため、新聞報道にある「通訳の巡警」とは日誌の著者であった可能性が高い。また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。

その他、観光団は南洋庁の職員2名によって引率されており⁽¹⁴⁰⁾、第9回日誌および新聞各紙においてその存在は頻繁に言及されている。

（2）参加者同士の交流

研究ノート

第9回日誌には、参加者同士の交流についての記述が散見される。まず、パラオ支庁内の住民同士のやりとりであるが、例えば6月26日、サイパンを見学した後の船中では、参加者が集まって、「サイパンガパラオヨリキレイニナツテイマスカラ、パラオモヨクキレイニシナケレバナラナイトハナシアイマシタ」とある⁽¹⁴¹⁾。同様に8月4日、テニアンを出発した船中では、次のような光景が見られたという。

船ノ中デナンニモスルコトガナクテ、ミンナハヤクパラオニ帰ツテ、村ノ人ニ内地デ見物シタコトヤ聞イタコトヲスグキカセテヤリタイト思イマシタ。オヒルカラートコロニアツマツテ、イロイロナハナシヲシマシタ。内地デーバンカンシンシタノワ、日本人ノヨクハタラクコトデアリマス。村ノ人ニ、コノハタラクコトヲヨクオシエテヤリ、ジブンタチモーシヨウケンメイニ、ハタラクネバナラナイト思イマシタ。ナオ今年ノ観光団ワ、村ニナニカ、キネンノテホンヲノコシタク、ミンナデイロイロナソウダンヲシマシタ⁽¹⁴²⁾。

また、パラオに到着する前日の8月8日の様子は、「ミンナガイヨイヨワカレル日ガチカクナツテ、オナゴリオシウゴザイマシタ。イママデナカヨクアソビマシタカラ、ナンダカワカレルノガイヤナキガシマス。ソシテミンナコレカラキヨウダイノヨウニナリ、ヨクハタライテモウ一度内地ニ見学ニイコトヲヤクソクシマシタ」と記されている⁽¹⁴³⁾。

一方、第9回日誌にはパラオとサイパンの住民同士の交流についても記述されている。例えば、内地観光を終えた一行は8月1日にサイパンに上陸しているが、その前日、船中では「サイパンノ人トアスワカレルカラ、内地デナカヨク見物シタコトヲイロイロオモイダシテハナシアイマシタ」とある⁽¹⁴⁴⁾。また、先に確認したとおり、サイパンでは「サイパンノ人ニゴヤツカイ」になっているが、「私タチ十四人ノモノワ、サイパンノ五人ノ家ニワカレトマリマシタ」とあることから⁽¹⁴⁵⁾、パラオから観光団に参加した14名が、サイパンからの参加者5名の家に分泊した可能性が高い。

おわりに

ここまで、1928年から1930年にかけて実施された3回の観光団の行程および参加者の詳細について、各史料に依拠しながら整理した。以下、各観光団の共通点および相違点に注意しながらその成果をまとめる。

まず行程であるが、1928年実施の第7回観光団は、25日間で横浜、東京、名古屋、京都、大阪、門司、横須賀、横浜を、1929年実施の第8回は、17日間で横浜、東京、京都、大阪、横浜を、1930年実施の第9回は、27日間で横浜、東京、京都、大阪、東京、横須賀、横浜をめぐる。

第7回における特徴は、門司出港の後に横須賀、横浜を訪れている点にあり、これは筆者がこれまでに明らかにした軍政期および委任統治期に実施された観光団においては、看取されない出来事である。第8回における特徴は、名古屋と門司を訪問していない点にあらう。前者の名古屋は、1923年に実施された観光団以降、継続的に見られた訪問先であり、後者の門司については、軍政期では計3回の観光団が同様に門司を訪れていないものの、委任統治期において門司を訪れないのは初めてのことであった。第9回も、第8回に引き続いて名古屋と門司を訪れておらず、結果的に、これまでの観光団において「定番」であった滞在先に連続して訪問しないこととなった。

また、宝塚への日帰りは3回の観光団に共通して見られるが、これは1927年実施の観光団から始まったものであり、ここにきて定着化が図られたと言える。一方、第7回と第9回で行われた横須賀鎮守府訪問は、軍政期の全6回および委任統治期における初回の観光団以来の実施となっている。その他、第8回の内地滞在日数が他の2回と比較して短くなっているが、これは上述した名古屋と門司を訪れていない影響であろう。同様に第9回も名古屋と門司を訪問していないものの、東京および大阪での滞在日数が他の2回よりも長くなっているため、3回の観光団のなかでも最長の内地滞在となった⁽¹⁴⁶⁾。

次に参加者であるが、人数に関しては21名、15名、19名という推移をたどり、性別に関しては、3回とも全員男性であった。また、属性に関しては首長や巡警といった肩書きが各観光団に共通して見られるほか、助役、豪農、

研究ノート

大工、職工といったものも散見される。そして、参加者が日本語で執筆した手記が、3回とも『日の光』に掲載された点や、通訳を兼ねている参加者が観光団に含まれていたことを踏まえると、3回の観光団に一定数の日本語使用者が参加していたと考えられる。その他、観光団を南洋庁の職員が南洋群島から引率するという形態は、委任統治期におけるすべての観光団において共通して見られる。

さて、上記のとおり、本稿で取り上げた3回の観光団に関しては、『日の光』に掲載された手記が存在するため、内地における行動の詳細だけではなく、内地到着前後の行程や参加者同士の交流の様子などを整理することができた。そこでは、筆者が過去の観光団を取り上げるなかで明らかにしてきた、参加者による「南洋群島観光」という局面だけではなく、小笠原に上陸した際の様子も再構成することができ、内地滞在だけでは完結しない観光団のありようがより一層明確になった。同様に、南洋群島各地から観光団に参加した住民が、観光団を契機に相互交流を実現させたという点は、日本による南洋群島統治を扱った既存研究において言及されてこなかった側面である。

今後、委任統治期において実施された観光団の詳細を段階的に明らかにすることにより、軍政期と委任統治期を通覧する観光団の全体像提示およびその背景整理を目指したい。

謝辞

故山口洋児氏および辻原万規彦先生（熊本県立大学）からは、本稿で取り上げた3回の観光団に限らず、委任統治期に実施された複数の観光団に関わる史料の提供を受けた。ここに記して謝意を示したい。

注

- (1) 依拠する史料の成立背景上、今日では使用が躊躇されている表現が引用されている場合がある。また、史料引用に際して、旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは省略し、適宜句読点を補った。なお、地名に関しては、当

委任統治期南洋諸島における内地観光団（1928－1930年）

時の南洋群島において呼称されていた地名を使用している。

- (2) 日本は1914年からアジア・太平洋戦争期に至るまで、実質的に南洋群島を統治した。本稿では、1914年から1922年3月までの臨時南洋群島防備隊による統治期間を軍政期、1922年4月以降の南洋庁による統治期間を委任統治期と呼称する。
- (3) 千住（2009）。
- (4) 千住（2012a）、千住（2012b）。
- (5) メンテル（1929）。『日の光』については、以下を参照のこと。千住（2012a：127）。
- (6) 『東京朝日新聞』によると、天候不順のため近江丸の到着は予定よりも3日遅れた。『東京朝日新聞』1928年8月6日付け7面。
- (7) メンテル（1929：16）。
- (8) メンテル（1929：17）。
- (9) メンテル（1929：19）。
- (10) 『東京朝日新聞』によると、第一試合の東京対京城は12時半開始15時7分終了、第二試合の大連対大阪は15時47分開始、18時15分終了となっている。なお、第一試合は2対1で東京の勝利、第二試合は7対6で大連の勝利となっている。『東京朝日新聞』1928年8月9日付け7面。
- (11) メンテル（1929：20）。
- (12) メンテル（1929：20）。
- (13) メンテル（1929：20）。
- (14) 8月19日付けで発行された『大阪毎日新聞』には、一行が「煙草専売局」を訪れた時の様子が描かれている。『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け夕刊2面。【表1】には専売局が含まれていないため、11日に専売局を訪れた可能性が高い。
- (15) メンテル（1929：21）。
- (16) 『大阪朝日新聞：名古屋版』1928年8月15日付け9面。
- (17) メンテル（1929：22）。
- (18) メンテル（1929：23）。
- (19) 『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け夕刊2面。
- (20) 『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け9面。
- (21) 『大阪毎日新聞』は、観光団が18日に朝日新聞社と毎日新聞社を訪問する予定であると伝えている。『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け夕刊2面。
- (22) メンテル（1929：24）。
- (23) 第7回日誌には、20日に毎日新聞社を訪れたとあるが、先に示したとおり、毎日新聞社への訪問は18日であった可能性が高い。また、『大阪毎日新聞』によると、20日はボタン工場への訪問が予定されている。『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け夕刊2面。

研究ノート

- (24) メンテル (1929 : 25)。
- (25) メンテル (1929 : 26)。
- (26) メンテル (1929 : 26)。
- (27) メンテル (1929 : 27)。
- (28) 『東京日日新聞：横横版』1928年8月28日8面。当時の横須賀鎮守府司令長官は、吉川安平。
- (29) メンテル (1929 : 28)。
- (30) メンテル (1929 : 28)。ここに至るまで、一行はたびたび内地各所で買い物をしているが、『大阪毎日新聞』には以下のような記述が見られる。「[参加者のなかには：引用者注] 三越でボヘミアン・ネクタイを買ったハイカラさんもゐる。おみやげは唱歌入り置時計、ミシン、トランク、おもちゃの釣鐘、軍艦、自動車等」。『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け夕刊2面。
- (31) メンテル (1929 : 29)。
- (32) メンテル (1929 : 18)。
- (33) メンテル (1929 : 24)。
- (34) 当時のパラオ支庁長は、伏田彌三郎。当時の南洋庁長官は、横田郷助。
- (35) 当時のヤップ支庁長は、立山茂。
- (36) 公学校は、住民児童を対象とした教育機関であり、修業年限は3年間となっている。当時、ヤップには3校の公学校が存在したが、立地条件および寄宿舎を併設していたのがヤップ公学校のみであることを踏まえると、一行が訪問したのはヤップ公学校であったと考えられる。
- (37) 小学校は、日本人児童を対象とした教育機関であり、内地の小学校と同様の基準にもとづいて運用されていた。当時、サイパンには、サイパン尋常高等小学校のみが存在していたため、一行はそこを訪れたと考えられる。公学校については、当時、サイパンにはサイパン公学校のみが存在していたため、一行はそこを訪れたと考えられる。
- (38) メンテル (1929 : 33)。
- (39) 千住 (2006 : 60)。
- (40) 南洋庁 (1934 : 472)。
- (41) 『都新聞』1928年8月6日付け13面。
- (42) 『東京朝日新聞』1928年8月6日付け7面。
- (43) 『大阪毎日新聞』1928年8月19日付け夕刊2面。
- (44) メンテル (1929 : 10)。
- (45) 引率者のうち1名はパラオ支庁に勤務する人物であるが、もう1名の詳細は不明である。日本図書センター (1997 : 247)。
- (46) メンテル (1929 : 15)。
- (47) メンテル (1929 : 16)。
- (48) メンテル (1929 : 24)。

委任統治期南洋諸島における内地観光団（1928－1930年）

- (49) メンテル（1929：27）。
- (50) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930）。第8回日誌はこれら3名による
共作であるが、それぞれの執筆担当部分は不明である。なお、フランクは
ポナベ、ポーアスはクサイ、アビジヤはヤルート在住であると記されてい
る。クサイは、ポナベ支庁に属する。
- (51) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：22）。
- (52) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：22）。
- (53) 同様の構図の写真が複数の新聞で使われている。『中央新聞』1929年7月
5日付け夕刊2面。『やまと新聞』1929年7月5日付け夕刊2面。『万朝報』
1929年7月5日付け2面。
- (54) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：22）。
- (55) 当時の東京市長は、堀切善次郎。
- (56) 『東京朝日新聞』1929年7月5日付け夕刊2面。
- (57) 『中央新聞』1929年7月5日付け夕刊2面。
- (58) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：23）。
- (59) 小村によるこの訓示は、『東京毎日新聞』1929年7月6日付け夕刊1面お
よび『都新聞』1929年7月6日付け12面に、ほぼ同じ内容で掲載されてい
るが、引用は『東京毎日新聞』のものによった。なお、拓務省は1929年6
月10日に発足している。
- (60) 『東京毎日新聞』および『都新聞』によると、この書記官は堀口という人
物である。『東京毎日新聞』1929年7月6日付け夕刊1面。『都新聞』1929
年7月6日付け12面。当時の南洋庁では、堀口満貞という人物が庶務課書
記官を務めており、同一人物であると考えられる。日本図書センター（1997：
250）。
- (61) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：23）。
- (62) この人物は、1916年7月から1923年12月まで霊南坂教会の「副牧師・宗
教教育主任」を務め、また、霊南坂教会が中心となって1919年に結成され
た「南洋伝道団」の幹事でもあった岩村清四郎のことであると考えられる。
南洋伝道団とは、日本統治下南洋群島へのキリスト教布教を目的に結成さ
れたものであり、岩村は1934年に南洋群島を訪れている。飯・府上編（1979）。
- (63) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：24）。
- (64) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：24）。
- (65) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：24）。
- (66) 第8回日誌には、「トウケウシユツチヨウジムシヨ」とだけあるが、これ
は南洋庁出張事務所と考えるのが妥当であろう。フランク、ポーアス、ア
ビジヤ（1930：25）。
- (67) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：25）。
- (68) フランク、ポーアス、アビジヤ（1930：26）。

研究ノート

- (69) フランク、ポーアス、アビジヤ (1930:28)。『南洋群島教育史』によると、1920年以降、継続的に複数の住民が内地の小学校、中等学校、宗教学校、工業徒弟学校へ留学している。1929年の時点で内地へ留学していた女性は小学校に通う2名のみであるため、この2名の小学生が横浜まで一行を見送りに来たと考えられる。南洋群島教育会 (1938 : 358)。
- (70) フランク、ポーアス、アビジヤ (1930 : 23)。
- (71) フランク、ポーアス、アビジヤ (1930 : 25)。
- (72) 当時の南洋庁長官は、横田郷助。
- (73) フランク、ポーアス、アビジヤ (1930 : 19)。
- (74) フランク、ポーアス、アビジヤ (1930 : 28)。
- (75) 22日に「ミズノサンカラキネンノ、オキドケイヲワケテモライマシタ」と記されている。フランク、ポーアス、アビジヤ (1930 : 29)。この「ミズノサン」という人物の詳細は不明であるが、当時ポナペ支庁に勤務していた職員のなかに、水野という人物が存在する。日本図書センター (1997 : 250)。
- (76) フランク、ポーアス、アビジヤ (1930 : 29)。
- (77) 千住 (2006 : 60)。
- (78) 南洋庁 (1934 : 472)。
- (79) 引率者のうち1名は南洋庁庶務課に勤務し、1名は通信課に勤務する人物であるが、もう1名の詳細は不明である。日本図書センター (1997 : 250)。なお、通信課に勤務する人物は、1926年に実施された観光団も引率している。
- (80) アシオ (1930)。第9回日誌にはアシオの肩書きとして、「アングアル巡警」と記載されている。
- (81) アシオ (1930 : 22-23)。この「野田」という人物の詳細は不明であるが、当時の南洋庁長官官房に勤務していた職員のなかに、野田という人物が存在する。日本図書センター (1997 : 253)。
- (82) アシオ (1930 : 23)。
- (83) 【図3】の写真にも写り込んでいるように、観光団は南洋群島から内地に艦甲や工芸品などを持ち込んだと考えられる。
- (84) 南洋庁が東京に開設していた事務所としては、「南洋庁出張事務所」という名称のものが1929年末まで確認できる。1930年1月1日以降は、「南洋庁東京出張事務所」という名称に改められており、所在地も「内閣内」から「麹町区西日比谷町」に変更されている。日本図書センター (1997 : 250-251)。
- (85) 当時の拓務大臣は、松田源治。
- (86) 当時の東京市長は、永田秀治郎。
- (87) アシオ (1930 : 24)。「ミシマサン」の詳細については、不明である。

委任統治期南洋諸島における内地観光団（1928－1930年）

- (88) アシオ（1930：24）。
- (89) 1930年の時点では、男性8名女性3名の住民が内地の各学校に留学しているが、この「プランス」がどの学校に留学していたかは不明である。南洋群島教育会（1938：358）。
- (90) 『時事新報』1930年7月6日付け7面。『中外商業新報』1930年7月6日付け7面。『万朝報』1930年7月6日付け3面。
- (91) 南洋群島協会編（1966：180）。
- (92) アシオ（1930：27）。
- (93) 『東京朝日新聞』1930年7月1日付け7面。『報知新聞』1930年7月1日付け7面。なお、『東京朝日新聞』は「中央放送局でパラオの民謡を放送」し、『報知新聞』は「AKから南洋情緒民謡を放送」する予定であると伝えている。
- (94) アシオ（1930：28）。南洋庁が1932年に発行した『南洋庁施政十年史』によると、為替貯金は1915年の「軍用郵便所」設置と同時に開始され、委任統治期においては郵便局がその業務を引き継いでおり、「近年各種産業の発達、移植民の増加、島民の開発と相俟つて、其の利用状況亦夥しい増加の趨勢にある」（南洋庁長官々房1932：412）。また、1934年7月にヤップを訪れた矢内原忠雄は、「十五六歳から二十五六歳迄の男子で、大部分は公学校卒業生」の住民約40名に対し、「郵便局に貯金して居る者は？」と問いかけたところ、「拳手四、五人」という結果であったと書き留めている（矢内原1935：532-533）。
- (95) 南洋興発については、以下を参照のこと。松江（1932）。
- (96) アシオ（1930：30）。
- (97) 『東京毎日新聞』1930年7月12日付け夕刊4面。
- (98) アシオ（1930：31）。この「出張所」とは、南洋庁東京出張事務所と考えるのが妥当であろう。
- (99) 1922年から1929年まで高崎佐太郎という人物がパラオ病院の院長を務めており、この人物が一行を案内したと考えられる。日本図書センター（1997：223-250）。
- (100) アシオ（1930：33）。
- (101) アシオ（1930：34）。
- (102) アシオ（1930：35）。
- (103) アシオ（1930：35）。
- (104) アシオ（1930：35）。
- (105) アシオ（1930：37）。
- (106) アシオ（1930：38）。
- (107) アシオ（1930：39）。
- (108) 『二六新聞』1930年7月7日付け夕刊2面。

研究ノート

- (109) 追浜飛行場で一行を案内した人物は、「昨年ヒコーキデ、サイパンニキタ人」であるという。アシオ（1930：40）。
- (110) 『東京日日新聞附録神奈川東京日日新聞』1930年7月25日付けイ-13面。
- (111) アシオ（1930：24）。
- (112) アシオ（1930：34）。
- (113) アシオ（1930：26）。
- (114) アシオ（1930：28）。
- (115) アシオ（1930：31）。
- (116) アシオ（1930：32）。
- (117) アシオ（1930：34）。
- (118) アシオ（1930：34）。
- (119) アシオ（1930：35）。
- (120) アシオ（1930：28-29）。
- (121) 当時のパラオ支庁長は、伏田彌三郎。南洋庁長官は、横田郷助。
- (122) アシオ（1930：17）。
- (123) 当時、ヤップには3校の公学校が存在したが、立地条件を踏まえると、一行が訪問したのはヤップ公学校であったと考えられる。
- (124) アシオ（1930：18）。
- (125) アシオ（1930：19）。
- (126) 当時、サイパンには4校の尋常小学校が存在したが、立地条件を踏まえると、一行が訪問したのはサイパン尋常小学校であったと考えられる。公学校については、当時、サイパンにはサイパン公学校しか存在していなかったため、一行が訪問したのはサイパン公学校であったと考えられる。
- (127) アシオ（1930：20）。
- (128) アシオ（1930：21）。
- (129) アシオ（1930：43）。
- (130) アシオ（1930：43-44）。
- (131) 南洋興発によるテナンの農場開発は、1928年より開始されている。松江（1932：179）。また、南洋興発はテナン製糖工場の落成式を1930年1月に行っている。松江（1932：190）。
- (132) アシオ（1930：44）。
- (133) アシオ（1930：47）。
- (134) アシオ（1930：46）。
- (135) アシオ（1930：47）。
- (136) 千住（2006：60）。
- (137) 南洋庁（1934：472）。
- (138) 『報知新聞』1930年7月1日付け7面。
- (139) 『東京朝日新聞』1930年7月1日付け7面。

委任統治期南洋諸島における内地観光団（1928－1930年）

- (140) 引率者のうち1名は南洋庁庶務課に勤務している人物であるが、もう1名の詳細は不明である。日本図書センター（1997：253）。なお、上述した明治座での出来事を回顧しているのが庶務課勤務の人物であり、この人物は、1925年に実施された観光団も引率している。
- (141) アシオ（1930：21）。
- (142) アシオ（1930：45）。
- (143) アシオ（1930：46-47）。
- (144) アシオ（1930：43）。
- (145) アシオ（1930：44）。
- (146) 各地における個別の訪問先に関する考察は、委任統治期に実施されたすべての観光団の詳細が明らかになった後に行いたい。

参考文献

- アシオ1930「第九回観光団日誌」（『日の光』8：16-47）。
- 飯清・府上征三編1979『霊南坂教会一〇〇年史』霊南坂教会創立一〇〇年記念事業実行委員会。
- 千住一2006「委任統治期南洋群島における内地観光団に関する覚書」（『立教大学観光学部紀要』8：59-64）。
- 千住一2009「植民地統治と「観光」政策：日本統治下南洋群島における内地観光団を事例に」（寺前秀一編『観光学全集第9巻：観光政策論』原書房：227-259）。
- 千住一2012a「委任統治期南洋群島における内地観光団（1922-1924年）」（『奈良県立大学研究季報』22（4）：123-136）。
- 千住一2012b「委任統治期南洋群島における内地観光団（1925-1927年）」（『奈良県立大学研究季報』23（1）：57-73）。
- 南洋群島教育会1938『南洋群島教育史』南洋群島教育会。
- 南洋群島協会編1966『椰子の木は枯れず：南洋群島の現実と思い出』草土文化。
- 南洋庁1934『第二回南洋庁統計年鑑』南洋庁。
- 南洋庁長官々房1932『南洋庁施政十年史』南洋庁長官々房。
- 日本図書センター1997『旧植民地人事総覧：樺太・南洋群島編』日本図書センター。
- フランク、ポーアス、アビジヤ1930「第八回観光団日誌」（『日の光』7：18-29）。
- 松江春次1932『南洋開拓拾年誌』南洋興発株式会社。
- メンテル1929「第七回観光団日誌」（『日の光』6：10-37）。
- 矢内原忠雄1935『南洋群島の研究』岩波書店。

表1 第7回内地観光団（1928年）の行程

日数	月/日	曜日	実施
1	8/4	土	横浜に到着、東京へ移動
2	8/5	日	教会
3	8/6	月	南洋庁出張事務所、二重橋、日比谷公園、郵船ビル、丸ビル
4	8/7	火	電話局、東京市役所、松屋
5	8/8	水	第二連隊、靖国神社、神宮球場
6	8/9	木	石鹼工場、浅草、「カフェオリエンタル」
7	8/10	金	上野動物園、有楽町にて南洋貿易主催の会食
8	8/11	土	〔専売局〕
9	8/12	日	貯金局、肥料工場
10	8/13	月	東京を出発、名古屋に到着
11	8/14	火	〔日本陶器〕、名古屋市役所、〔尾張時計〕、〔名古屋城〕
12	8/15	水	三菱工場、放送局、松坂屋、名古屋を出発、京都に到着
13	8/16	木	東本願寺、丸山公園、「ヤオマサ」、比叡山
14	8/17	金	
15	8/18	土	京都を出発、大阪に到着、造幣局、大阪市役所、公会堂、朝日新聞社、〔毎日新聞社〕
16	8/19	日	宝塚、動物園
17	8/20	月	高島屋
18	8/21	火	下関を経由して門司に到着
19	8/22	水	八幡製鉄所、旭ガラス工場
20	8/23	木	「アサヒノセメント」
21	8/24	金	門司を出発
22	8/25	土	船中
23	8/26	日	船中
24	8/27	月	横浜に到着、横須賀へ移動、横須賀鎮守府、横浜へ移動
25	8/28	火	横浜を出発

出典)

メンテル(1929)および各新聞報道にもとづき、筆者作成。

注)

「」内の記述は、メンテル(1929)における表記のまま。

〔〕内の記述は、新聞報道にもとづく。

8/17：京都駅で大阪行きの列車を待ったものの、大阪行きを断念し、京都に滞在している。

表2 第8回内地観光団（1929年）の行程

日数	月/日	曜日	実施
1	7/3	水	横浜に到着、東京へ移動
2	7/4	木	二重橋、丸ビル、東京市役所、〔南洋庁出張事務所〕、丸ビル精養軒にて「大ヨウシヨウテン」主催の会食
3	7/5	金	貯金局、拓務省、華族会館〔にて小林欣一主催の会食〕、愛宕小学校、愛宕山、東京放送局
4	7/6	土	東京市立第一中学校、東京府立第五高等女学校、明治神宮
5	7/7	日	霊南坂教会、上野公園、動物園、松坂屋
6	7/8	月	新宿御苑、近衛第一連隊、淀橋専売局、新宿松屋
7	7/9	火	花王石鹼工場、浅草、「カフェーオリエント」、花屋敷、「ダルマ」、銀座
8	7/10	水	銀座、「カフェータイガー」にて南洋貿易主催の会食、松屋、三越
9	7/11	木	東京を出発、京都に到着
10	7/12	金	京都市役所、京都御所、東本願寺、「カフェーキクスイ」にて京都市主催の会食、岡崎公園
11	7/13	土	比叡山、琵琶湖疎水、インクライン
12	7/14	日	京都を出発、大阪に到着
13	7/15	月	大阪城、天王寺公園、大阪市役所、朝日新聞社、毎日新聞社
14	7/16	火	造幣局、高島屋、大日本紡績
15	7/17	水	宝塚、大阪を出発
16	7/18	木	横浜に到着
17	7/19	金	横浜を出発

出典)

フランク、ポーアス、アビジヤ(1930)および各新聞報道にもとづき、筆者作成。

注)

「」内の記述は、フランク、ポーアス、アビジヤ(1930)における表記のまま。

〔〕内の記述は、新聞報道にもとづく。

7/10：午前中、フランクとポーアスは一行と別行動をしている。

表3 第9回内地観光団（1930年）の行程

日数	月/日	曜日	実施
1	6/30	月	横浜に到着、東京へ移動
2	7/1	火	健康診断、日比谷公園、南洋庁東京出張事務所
3	7/2	水	宮城遙拝、南洋庁東京出張事務所、拓務省、松本楼にて拓務省主催の会食、東京市役所、日本郵船、丸ビル
4	7/3	木	銀座、明治神宮、神宮球場
5	7/4	金	上野公園、動物園、松坂屋
6	7/5	土	淀橋専売局、大松閣にて南洋貿易主催の会食、近衛歩兵第一連隊、靖国神社、明治座
7	7/6	日	小石川教会
8	7/7	月	花王石鹼工場、浅草、「カフェーオリент」にて「南海商事会社」主催の会食、花屋敷、富士館
9	7/8	火	貯金局、松屋、三越、東京劇場
10	7/9	水	泰明小学校、御茶ノ水高等女学校、市立第一中学校、南洋興発
11	7/10	木	大日本人造肥料、レコード石鹼会社
12	7/11	金	銀座、高島屋
13	7/12	土	東京を出発、京都に到着
14	7/13	日	比叡山、インクライン、京極、松竹座
15	7/14	月	京都市役所、京都御所、商品陳列所、京都大学病院、東本願寺、サイダー工場
16	7/15	火	京都を出発、大阪に到着、大阪市役所
17	7/16	水	新世界、道頓堀、千日前、高島屋、海水浴
18	7/17	木	島田硝子工場、中本卸製作所、文楽座
19	7/18	金	造幣局、大阪城、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社
20	7/19	土	川崎造船所、湊川神社、元町、新開地
21	7/20	日	宝塚、動物園
22	7/21	月	大阪を出発、東京に到着
23	7/22	火	浅草、花屋敷、「カジノフトリユー」、松竹座
24	7/23	水	国技館〔「富士登山大納涼会」〕
25	7/24	木	東京を出発、横須賀に到着、横須賀鎮守府、横浜へ移動
26	7/25	金	伊勢崎町
27	7/26	土	横浜を出発

出典)

アシオ(1930)および各新聞報道にもとづき、筆者作成。

注)

「」内の記述は、アシオ(1930)における表記のまま。

〔〕内の記述は、新聞報道にもとづく。

7/11：一部の参加者が昼の時間帯に警視庁を訪れている。

7/14：一部の参加者が夕食後に博覧会を訪れている。

7/18：一部の参加者が午前中に高島屋を訪れている。